

高齢者が居住する住宅のリフォーム実態と リフォーム前後におけるトイレの変化

—愛知県「わが家のリフォームコンクール」応募作品をもとに—

小川 正光, 水野 陽子^{*})

1. 研究の背景と目的

少子高齢化や社会情勢、経済構造の変化等を背景として、わが国の住宅市場は大きな転換期を迎えている。住宅の新設着工戸数が将来的に拡大する必然性は乏しいと考えられ、今後わが国では、既存ストックの有効活用や循環が求められている。この既存ストックの有効活用・循環にあたって「リフォーム」の担う役割は非常に大きく、注目されている。

また、住宅リフォーム推進協議会の平成 24 年度住宅リフォーム実例調査によると、施主の年齢は 50~60 代が中心であり、高齢者または老後を考慮した者が行うリフォームが多いことがうかがえる。高齢者又は老後を考慮した者が住宅リフォームを行う利点としては、①住み慣れた住宅に住み続けられる点、②建替えよりも比較的安価で済むため老後の資金を節約できる点、③高齢者それぞれの状態に合わせた住宅改善ができる点、④高齢者の自立度が向上して介護者にもゆとりが生まれる点の 4 つがあげられる。介護保険制度で住宅改修を助成したり、リフォームヘルパーが介護リフォームを手助けしてくれたり、社会全体で高齢者の住宅リフォームを推し進めており、50~60 代の施主による住宅リフォームは今後も盛んに行われていくと考えられる。

以上のような状況をふまえ、本研究では、愛知県内で実施された住宅リフォームコンクールの応募作品を分析することにより、高齢者のための住宅リフォームや住宅のあり方について明らかにすることを目的とする。また、高齢者はトイレの使用の頻度が高くトイレに快適さと安全さが求められる点に着目し、高齢者が居住する住宅におけるトイレのリフォームの実態について検討することで、今後の住宅リフォームに対する示唆を与えることを目的とする。

2. 研究の方法

愛知県「わが家のリフォームコンクール」応募作品 228 サンプルを分析した（平成 21 年度 41 サンプル、平成 22 年度 53 サンプル、平成 23 年度 43 サンプル、平成 24 年度 44 サンプル、平成 25 年度 47 サンプル）（表 1）。このうち、高齢者を含む世帯 118 サンプルを抽出した（表 2）。

表 1 年度別、リフォームコンクール応募作品サンプル数（有効のみ）

	H21 年度	H22 年度	H23 年度	H24 年度	H25 年度	合計
サンプル数 (戸)	41	53	43	44	47	228

^{*}) 本学家政教育講座・学生

表2 年度別、高齢者を含む世帯のリフォームコンクール応募作品サンプル

	H21 年度	H22 年度	H23 年度	H24 年度	H25 年度	合計
サンプル数 (戸)	23	31	23	16	25	118

3. 調査対象作品における世帯の検討

まず、家族構成タイプを設定した。サンプル住宅を、家族構成別に、「単身世帯」、「高齢単身世帯」、「夫婦世帯」、「高齢夫婦世帯」、「夫婦+子世帯」、「高齢夫婦+未婚の子世帯」、「親+夫婦世帯」、「親+夫婦+子世帯」、「祖父母+親+夫婦+子世帯」の9タイプに分類した(図1)。ただし、高齢世帯、夫婦世帯、祖父母世帯については、以下のように定義した。

- ・ 高齢者は、60歳以上を原則とする。しかし、正確な年齢を得られないサンプルにおいては、定年を迎えた場合又は老後を考慮したリフォームを行った場合、高齢世帯とみなす。
- ・ 子どもの親が片親である場合でも、夫婦とみなす。
- ・ 祖父、祖母どちらかが一人であっても、祖父母世代とみなす。

次に、世帯における高齢者の有無を検討した。家族構成において、「高齢単身世帯」、「高齢夫婦世帯」、「高齢夫婦+未婚の子世帯」、「親+夫婦世帯」、「親+夫婦+子世帯」、「祖父母+親+夫婦+子世帯」をまとめて「高齢者を含む世帯」とし、全有効サンプルから上記の6世帯を除いた世帯を、「高齢者を含まない世帯」として分類した。その結果、「高齢者を含む世帯」は118サンプル、「高齢者を含まない世帯」は110サンプルであり、「高齢者を含む世帯」は全有効サンプルの半分以上を占めた(図2)。このことから、高齢者のた

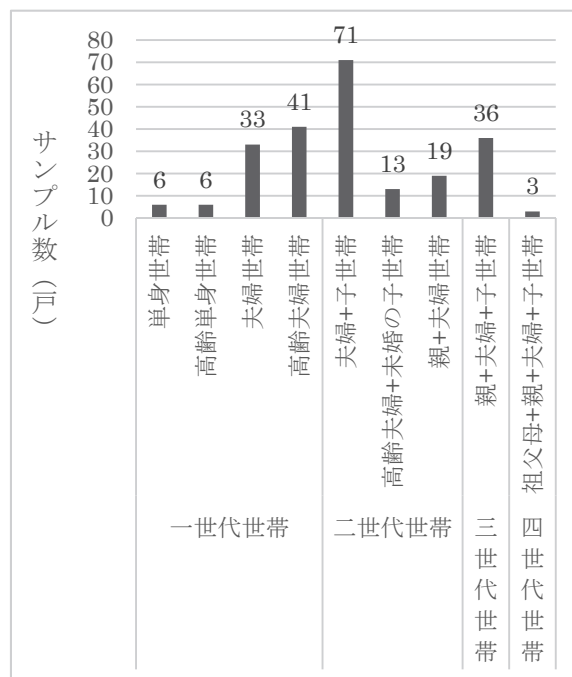


図1 家族構成タイプ別、サンプル数
(サンプル数：228戸)

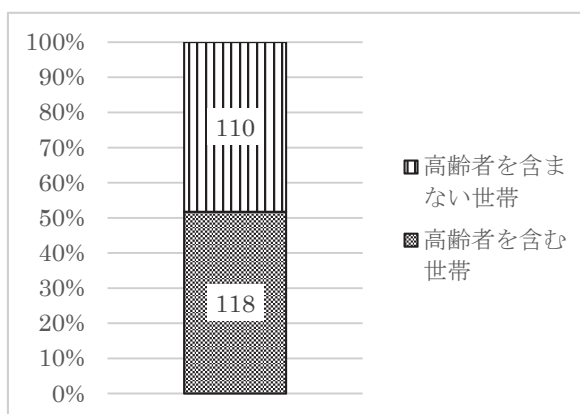


図2 高齢者を含む世帯と含まない世帯の割合
(サンプル数：228戸)

めのリフォームが多く行われていることがうかがえる。

4. 高齢者を含む世帯の住宅の検討

4.1 建て方

リフォームコンクール応募作品を、「一戸建て」、「共同建て」の2タイプに分類した。

高齢者を含む世帯において、「一戸建て」は118サンプル中108サンプル、「共同建て」は10サンプルである(図3)。高齢者を含まない世帯では、「一戸建て」の割合は6割弱なのに対し、高齢者を含む世帯では9割を超える結果になった。高齢者がいない場合は「共同建て」が全住宅の約半数を占めているが、高齢者を含む世帯においてはほとんどの世帯が「一戸建て」のリフォームを行っていたことから、高齢者を含む世帯では、過去に購入した「一戸建て」の住宅をリフォームにより大切に住み続けようとしていることがうかがえる。

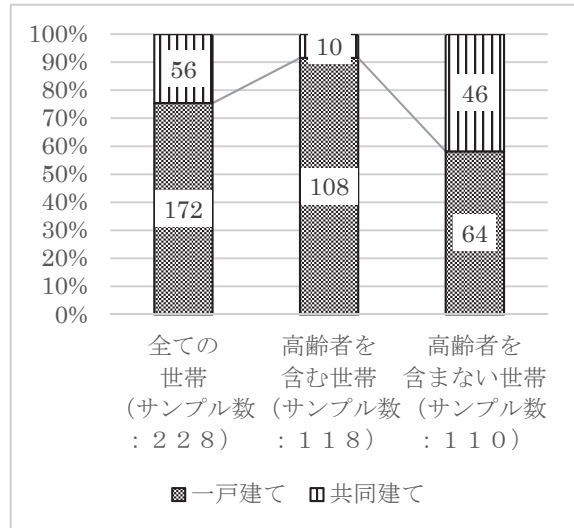


図3 世帯タイプ別、建て方の割合 (サンプル数: 228戸)

4.2 構造

「木造」、「鉄骨造」、「RC造」、「その他」の4タイプに分類した。ただし、「木造」+「鉄骨」など、2つ以上の構造タイプを兼ねるものは「その他」として分類したため、「鉄骨造」、「RC造」に含まれない。

高齢者を含む世帯において、118サンプル中、「木造」は85サンプル、「鉄骨造」は13サンプル、「RC造」は18サンプル、「その他」の構造が2サンプルであり、7割以上が「木造」という結果となった(図4)。本研究の図6によると、高齢者を含む世帯の築年数の平均が36年であることから、当時新築であった木造の住宅が現在まで残されていると考えられる。

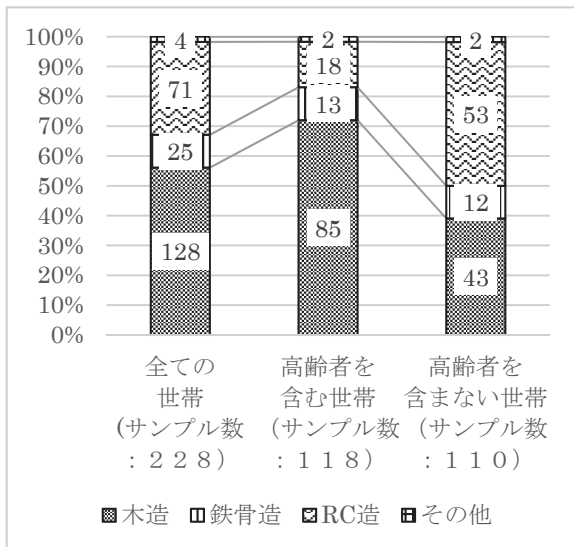


図4 世帯タイプ別、構造の割合 (サンプル数: 228戸)

4.3 築年数

高齢者を含まない世帯と比べ、高齢者を含む世帯では、築年数30年から49年の範囲の割合が多くなっている(図5)。より細かく分類すると、最もサンプル数が多かった築年数の範囲は、高

高齢者を含む世帯では築 20 年から築 29 年であった (図 6)。高齢者を含む世帯においては、住宅購入当時から現在まで 20 年から 30 年程住み続け、定年を機にリフォームする世帯が多いと推測される。

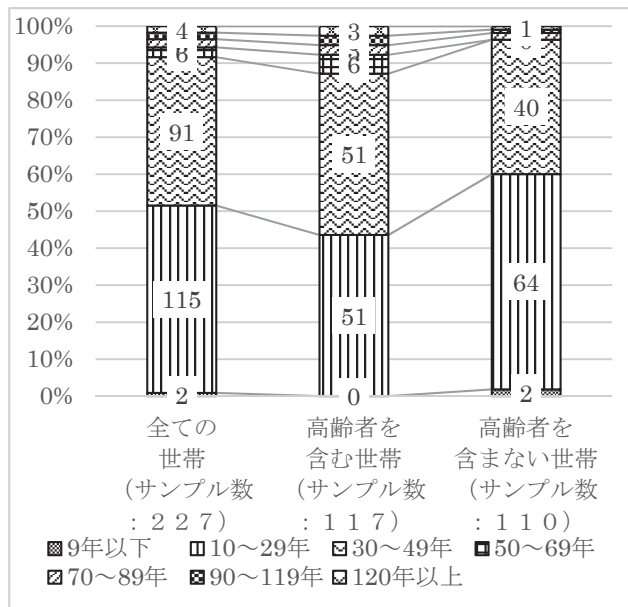


図 5 世帯タイプ別、築年数の割合 (サンプル数 : 227 戸)

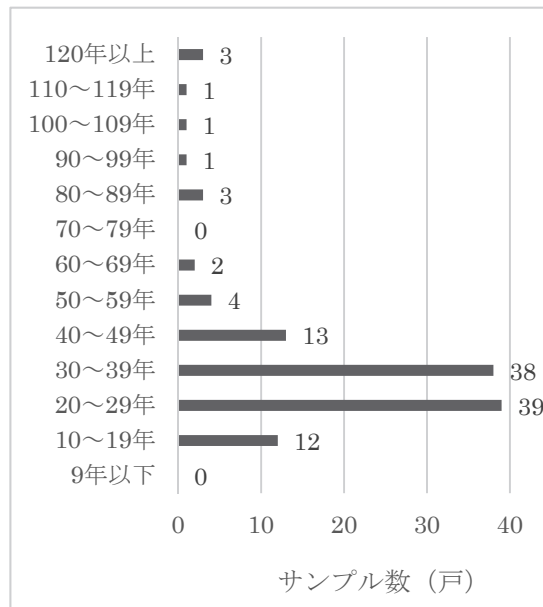


図 6 高齢者を含む世帯における築年数 (サンプル数 : 117 戸)

4.4 延床面積 (リフォーム後のもの)

高齢者を含む世帯においては、100 m²から 199 m²の範囲の住宅が多くみられ、最も多い延床面積は 100 m²から 149 m²の範囲だった (図 7)。また、150 m²以上の規模が占める割合は、高齢者を含まない世帯よりも高くなり、大きいものが多い。

高齢者を含む世帯においてリフォーム後の延床面積が大きくなる傾向の理由としては、高齢者が安全に暮らせるようにするため、手すりを設置したり車椅子が通れるようにしたりといった余裕をもったスペースを、リフォームにより確保しているからと考えられる。

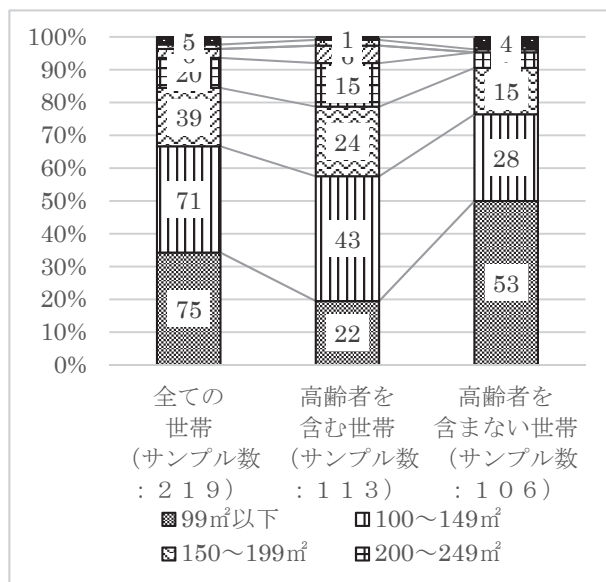


図 7 世帯タイプ別、延床面積の割合 (サンプル数 : 228 戸)

4.5 リフォーム面積

高齢者を含む世帯においても、含まない世帯においても、50㎡から99㎡の範囲をリフォームする割合が最も多かった(図8)。しかし、高齢者を含む世帯と含まない世帯とを比較してみると、高齢者を含む世帯では、他の規模が占める割合も高く、高齢者を含む世帯と比べて、世帯ごとに、様々な広さをリフォームしていることがわかる。これは、間取りを変更するような大規模なリフォームは、広い延床面積を持つ高齢者を含む世帯では行いにくかったり、高齢になるにつれローンが組みにくくなるなど大きな出費がしにくく、出費できる範囲に合わせて工事しているからと考えられる。

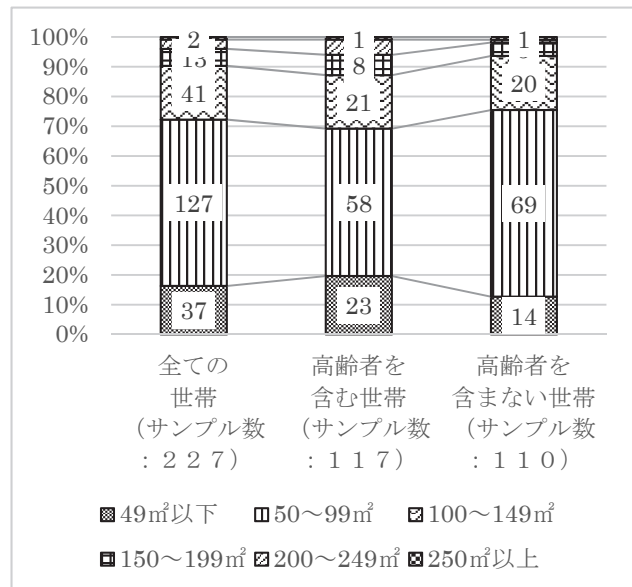


図8 世帯タイプ別、リフォーム面積の割合 (サンプル数: 227 戸)

4.6 リフォーム率 (延床面積に対するリフォーム面積の割合)

高齢者を含む世帯において、最も多いリフォーム率は、「100%～109%」の範囲であった(図9)。しかし、100%以上のリフォーム率の割合は2割程度しかなく、「10%～49%」、「50%～99%」の割合も多く見られた(図10)。これは、4.5のリフォーム面積でも示したように、高齢者を含む世帯においては、部分的な改修を行う世帯が多いからと考えられる。

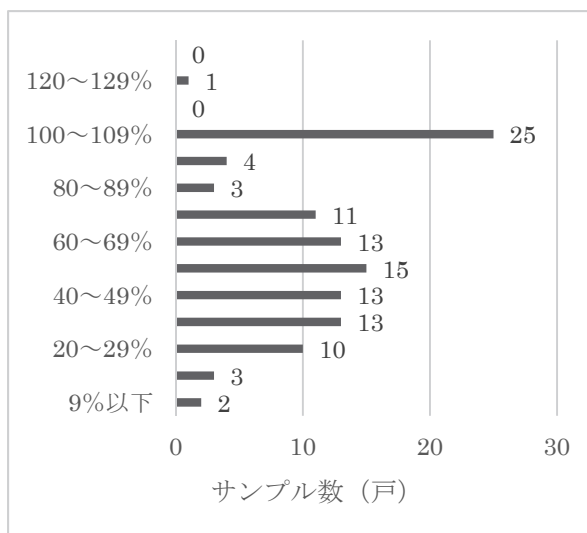


図9 高齢者を含む世帯におけるリフォーム率 (サンプル数: 113 戸)

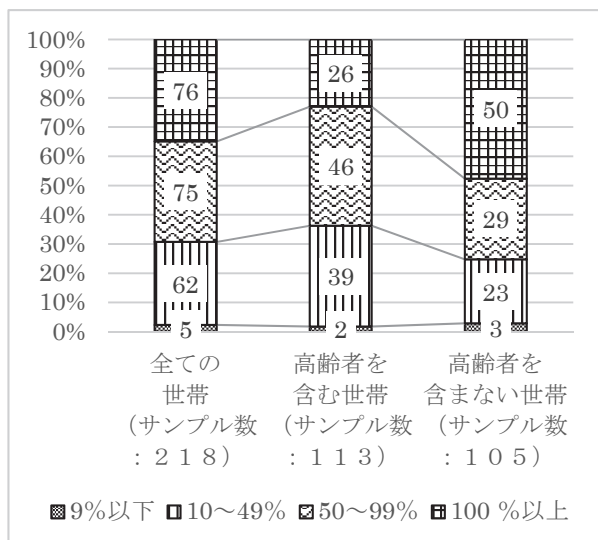


図10 世帯タイプ別、リフォーム率の割合 (サンプル数: 218 戸)

4.7 水廻り設備のリフォーム

高齢者を含む世帯でも含まない世帯でも、ほとんどの世帯が、水廻り設備のリフォームを行っていた（図 11）。最も多くリフォームされていた水廻り設備は「台所」であり、全体の約 9 割の世帯が「台所」のリフォームを行っていた。これは、設備の老朽化を改善し、熱源を近代化するとともに、「台所」を含む部屋が家族との団らん場として重視されているからである。従来の背面型のキッチンから、対面型のキッチンにリフォームする世帯が増えているからだと考えられる。

また、水廻り設備のリフォームを行なった世帯は、「水廻り全体」（トイレ・約 8 割、浴室・約 8 割、台所・約 9 割、洗面所・約 8 割）をリフォームするサンプルが最も多かったが、高齢者を含む世帯においては、「トイレのみ」や「トイレと台所」など、トイレを中心にリフォームを行っている世帯が目立った（図 12）。これは、高齢者がトイレに快適さを求めている、従来のトイレに不満を感じていたりしている表れと考えられる。

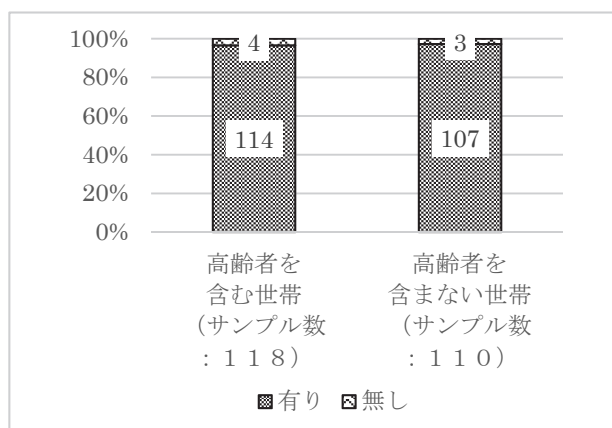


図 11 世帯タイプ別、水廻り設備のリフォームの有無 (サンプル数：228 戸)

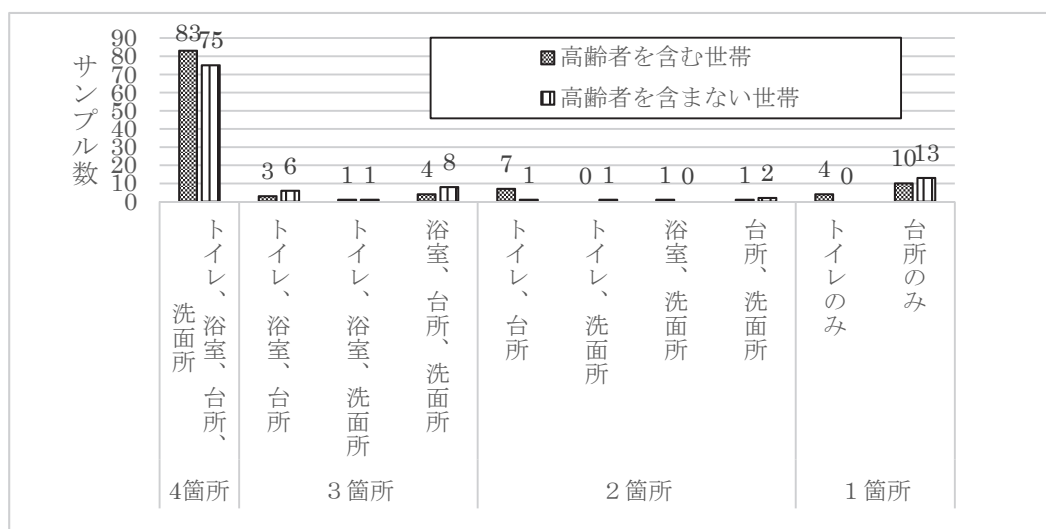


図 12 世帯タイプ別、水廻り設備のリフォーム箇所数(サンプル数：221 戸)

5. 高齢者を含む世帯におけるトイレのリフォームの検討

5.1 高齢者を含む世帯の水廻り設備のリフォーム実態

高齢者を含む世帯において、水廻り設備の中でもトイレに着目してリフォームが行われている理由のひとつとして、高齢者の身体の衰えによる排泄機能の低下という点があげられる。厚生労働省「平成 25 年国民生活基礎調査」によると、便秘や頻尿など排泄に関わる身体症状は、65 歳

以上の高齢者が訴えている割合が高く、高齢者が排泄機能に不安や不満を感じていることを示している（図 13）。特に、頻尿を感じている高齢者にとって、自宅のトイレは一日に何度も向かう場所であり、トイレには快適さや安全が求められている。

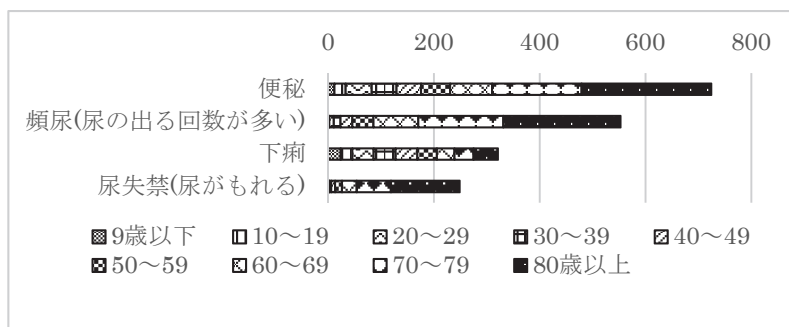


図 13 年齢階級・症状（複数回答）別にみた有訴者（人口千対） 出典：厚生労働省「平成 25 年国民生活基礎調査」

5.2 トイレのリフォームの分析対象

高齢者を含む世帯において、高齢者が使用するトイレのリフォームの有無を集計し、調査対象のトイレサンプルとした（表 3）。集計にあたり、便器自体に手が加えられていなくても、周辺設備（手すりや照明）の追加、床や扉の変化なども、リフォームを行ったとみなした。また、集計は重複集計とし、複数のトイレを所有しているサンプルについて、トイレを二箇所以上リフォームしている場合は、それぞれのトイレを重複して集計した。なお、三世帯以上の世帯においては、共有スペースや親・祖父母世帯のスペースにあるトイレのみを集計し、夫婦・子世帯にあるトイレはリフォームしていても集計に加えなかった。

表 3 トイレの分析における調査対象

	H21 年度	H22 年度	H23 年度	H24 年度	H25 年度	合計
サンプル数 (戸)	21	25	17	18	19	100

以上のトイレサンプルについて、リフォーム前後における、①トイレと浴室の配置の変化、②トイレの広さの変化、③トイレの扉の変化、④高齢者の寝室からトイレまでの距離、の 4 つの視点から分析する。

5.3 トイレと浴室の配置の変化

まず、トイレと浴室の配置の関係を、次のように 4 タイプに設定した。離れなどのリフォームで、トイレ以外の水廻り設備が無いものを「トイレ単体型」（以下「単体型」）、トイレと浴室又は浴室に通じる水廻り設備の部屋が直接行き来できるものを「トイレ・浴室融合型」（以下「融合型」）、トイレと浴室又は浴室に通じる水廻り設備の部屋が隣り合っているか、扉同士の距離が 1.5 間未満であるものを「トイレ・浴室分離型」（以下「分離型」）、トイレと浴室又は浴室に通じる水廻り設備の扉同士の距離が 1.5 間以上のものを「トイレ・浴室独立型」（以下「独立型」）とした。

その集計結果をみると、リフォーム前もリフォーム後も、「分離型」のサンプルが最も多かった（図 14）。既設のトイレをリフォームする場合においては、リフォーム前「融合型」や「分離型」の世帯は、リフォーム後も同じタイプのままか、「融合型」ならば「分離型」、「分離型」ならば「融合型」へとリフォームしており、リフォーム前「独立型」の世帯も、約 3 分の 1 が「融合型」や「分離型」へリフォームしていた（表 4）。このことから、高齢者を含む世帯では、トイレと浴室があまり離れていない配置が好まれていることがわかった。

しかし、高齢者用のトイレを新たに増設する場合においては、「独立型」の配置になる傾向があった。これには、間取りの中央寄りにあることが多い水周り付近に新たにトイレを増設しようとする、その周りの居室の間取りも変更しなければならずリフォームが大規模になってしまい好まれない場合と、すでに介護を受けている世帯では、デイサービスなどの介護者が外から入りやすいよう玄関付近に高齢者の寝室を設置しており、寝室に近い位置にトイレを設置しようとする、と必然的に浴室から離れてしまうという、2 つの場合の可能性が考えられる。

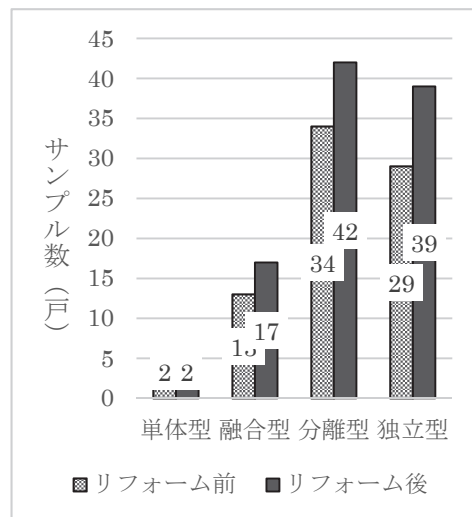


図 14 リフォーム前後におけるトイレと浴室の配置のタイプ (サンプル数: 100 戸)

表 4 リフォーム前後におけるトイレと浴室の配置の変化 (戸)

前 \ 後	トイレ単体型	トイレ・浴室融合型	トイレ・浴室分離型	トイレ・浴室独立型	不明	合計
トイレ単体型	1	0	0	1	0	2
トイレ・浴室融合型	0	7	5	1	0	13
トイレ・浴室分離型	0	5	24	5	0	34
トイレ・浴室独立型	0	3	8	18	0	29
増設	1	2	4	14	0	21
不明	0	0	1	0	0	1
合計	2	17	42	39	0	100

建て方別に、リフォーム後におけるトイレと浴室の配置をみると、共同建てでは「融合型」が一戸建てよりも若干少なかった（図 15）。これは、扉を 2 つ以上設置することが望ましい「融合型」は、延床面積が狭い共同建てでは実施しにくいからと考えられる。

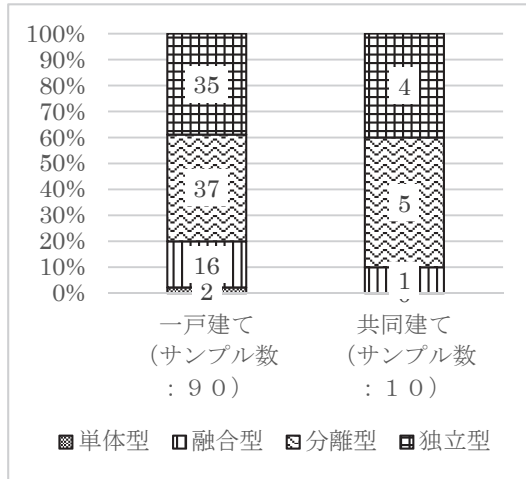


図 15 建て方別、トイレと浴室の配置タイプの割合 (サンプル数: 100 戸)

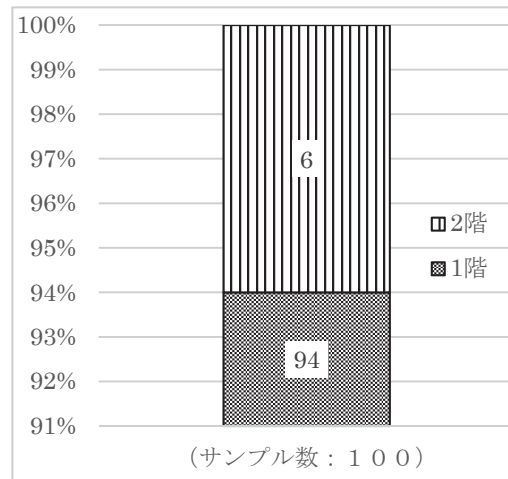


図 16 高齢者が使用するトイレの場所の割合 (サンプル数: 100 戸)

また、リフォーム後におけるトイレの位置としては、1階に設置する世帯がほとんどであった (図 16)。

5.4 トイレの広さの変化

トイレの広さの変化について検討した。リフォーム前において、最も多い広さの範囲は「0.8㎡～1.0㎡未満」であり、リフォーム後においては「1.4㎡～1.6㎡未満」の範囲であった (図 17)。平均は、リフォーム前では 1.41㎡、リフォーム後では 1.70㎡であり、リフォーム後の方が、リフォーム前より平均して 0.29㎡広がっていた。

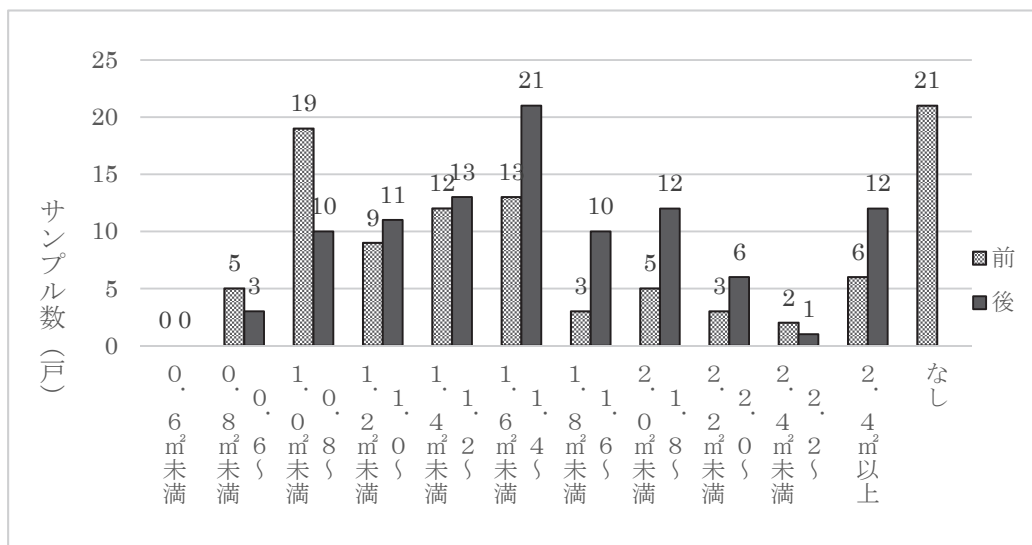


図 17 リフォーム前後におけるトイレの広さの変化 (サンプル数: 100 戸)

リフォーム前後において、トイレの広さがどのように変化したかを検討すると、リフォーム前トイレの広さが 1.2 m²未満のサンプルは、トイレを広くする傾向があることがうかがえた。このことから、高齢者にとって 1.2 m²未満のトイレは、狭くて使いにくいのではないかと考えられる(表 5)。高齢者を含む世帯において、広いトイレが求められている理由としては、手すりなどの新たな設備設置のためや、高齢者の排泄を介助する人のためのスペースが必要だからという 2 点の理由があげられる。

表 5 リフォーム前後におけるトイレの広さの変化(戸)

前 \ 後	0.6m ² 未満	0.6~0.8m ² 未満	0.8~1.0m ² 未満	1.0~1.2m ² 未満	1.2~1.4m ² 未満	1.4~1.6m ² 未満	1.6~1.8m ² 未満	1.8~2.0m ² 未満	2.0~2.2m ² 未満	2.2~2.4m ² 未満	2.4m ² 以上	不明	合計
0.6m ² 未満													0
0.6~0.8m ² 未満		2		2				1					5
0.8~1.0m ² 未満			8	2	1	3	1	3	1				19
1.0~1.2m ² 未満				4		2	2				1		9
1.2~1.4m ² 未満			1		9		1				1		12
1.4~1.6m ² 未満					1	11					1		13
1.6~1.8m ² 未満							2				1		3
1.8~2.0m ² 未満								4	1				5
2.0~2.2m ² 未満							1	1	1				3
2.2~2.4m ² 未満						1				1			2
2.4m ² 以上											6		6
増設		1	1	3	2	3	3	3	3			2	21
不明						1						1	2
合計	0	3	10	11	13	21	10	12	6	1	12	1	100

建て方別に、リフォーム前後におけるトイレの広さの変化をみたところ、一戸建てでは半分以上のサンプルが、トイレの広さの変更、もしくは増設を行っているのに対し、共同建てではあまりみられなかった(図 18)。これは、延床面積が狭い共同建てでは、トイレの広さを変化させにくいためと考えられる。

5.5 トイレの扉の変化

扉の分類にあたり、ひとつのトイレに 2 箇所以上の出入口を持つサンプルでは、全て同じ構造の扉の場合には、その構造に分類し、

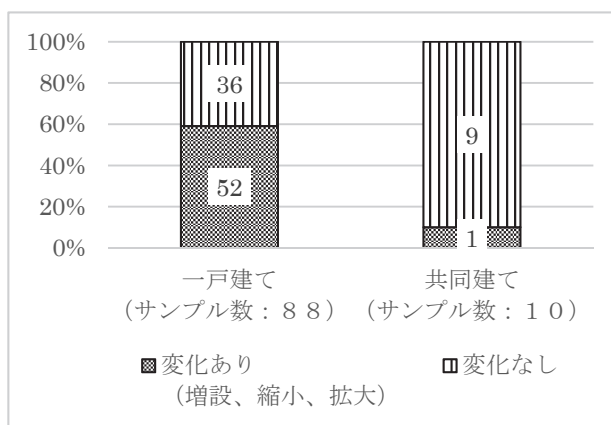


図 18 建て方別、リフォーム前後におけるトイレの広さの変化(「不明」除く)(サンプル数: 98 戸)

異なる構造の扉の場合、「その他」に分類した。

その結果、リフォーム前、最も多かった扉のタイプは「開き戸（外開き）」であり、リフォーム後は「引き戸」であった（表6）。「開き戸（外開き）」タイプは、リフォーム後も同一タイプのままのサンプルもあったが、約半数が「引き戸」タイプに変更していた。新しく高齢者用のトイレを増設したサンプルでも、「引き戸」か「開き戸（外開き）」を選択するケースが多く、高齢者を含む世帯においては、「引き戸」または「開き戸（外開き）」が好まれていることがわかった。リフォーム前12サンプルみられた「開き戸（内開き）」タイプは、リフォーム後にはほとんどが他のタイプの扉に替わっており、高齢者を含む世帯において「開き戸（内開き）」の扉は、好まれないことがわかった。

表6 リフォーム前後におけるトイレの扉の変化（戸）

前	後	開き戸		引き戸	折り戸	その他 （「引き戸」+ 「開き戸（外開き）」）	不明	計
		外開き	内開き					
開き戸	外開き	32	0	28	1	1	0	62
	内開き	4	1	7	0	0	0	12
引き戸		1	0	2	0	0	0	3
折り戸		0	0	0	0	0	0	0
その他		0	0	0	0	0	0	0
不明		2	0	0	0	0	0	2
増設		7	1	13	0	0	0	21
計		46	2	50	1	1	0	100

「引き戸」は、「開き戸」よりも開口部が広く取れ、足の不自由な人や車椅子の人にも入りやすいという利点がある。また、真横に「扉を引く」という動作は大きな力を要しない。これらのメリットから、「引き戸」が増加したと考えられる。しかし、「引き戸」は開口部が広く取れる反面、壁に扉を収納するためのスペースが必要なため、間取りの構造上設置しにくい場合もある。リフォーム後におけるトイレの扉と広さの関係性をみたところ、最も多い扉である「引き戸」と、次点の「開き戸（外開き）」が、どのトイレの広さでも同じ割合を占めているが、1.0㎡未満の広さでは、「開き戸（外開き）」の割合が若干多くなっている（図19）。これは、1.0㎡未満のトイレの広さでは、「引き戸」の扉を収納するスペースが確保しにくいからと考えられる。

リフォーム後にはほとんど見られなくなった「開き戸（内開き）」タイプは、奥へ「扉を押す」動作に大きな力を必要とせず、中に入りやすいというメリットがある。しかし、扉を開けるスペースは最低限トイレ内に必要であり、トイレが狭い場合は、トイレから出る際に自分の体に扉が当たり、開けにくく感じてしまう。また、高齢者がトイレの中で倒れた際、他の人が助けに入る時、トイレ内部に十分な空間がないと、高齢者に扉があたり、中に入れなくなるという問題が起

きる。これらのデメリットが原因で、「開き戸（内開き）」タイプの扉が減少したのではないかと考えられる。

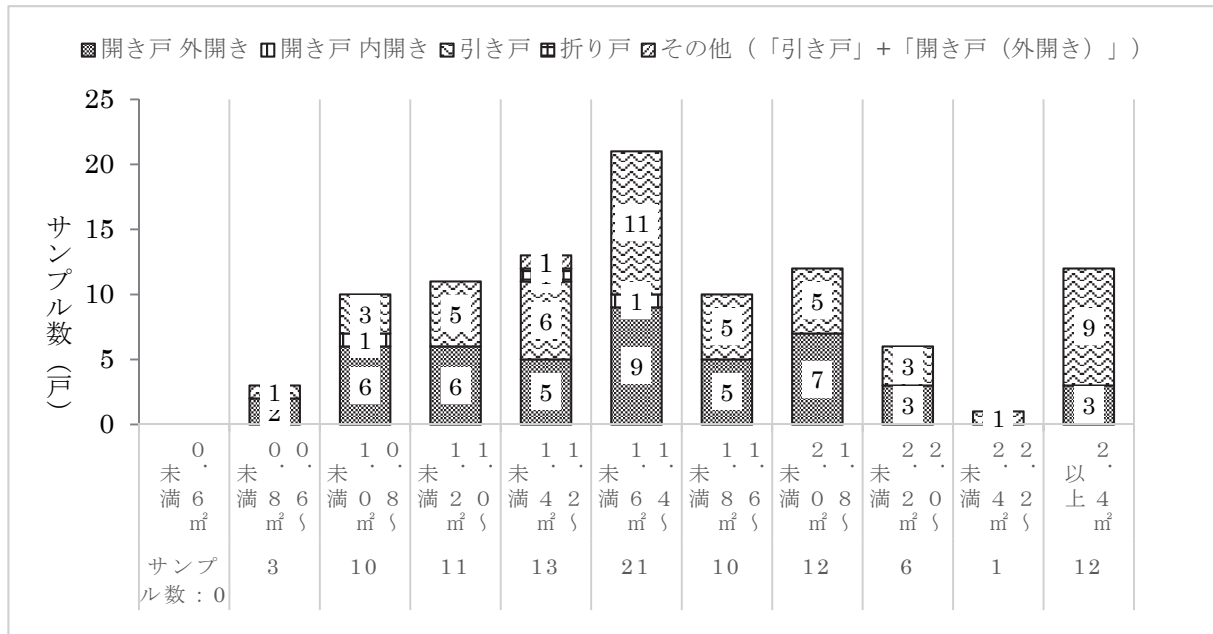


図 19 リフォーム後におけるトイレの広さと扉の関係（「不明」を除く）
（サンプル数：99 戸）

増設したサンプルや不明のサンプルを除き、建て方別に、リフォーム前後でトイレの扉を変更した世帯をみた。その結果、どちらの建て方でも、半分以上の世帯が、扉の変更を行っていることがわかった（図 20）。このことから、管理規約の関係でリフォームに制限がある共同建てでも、扉のリフォームが行われていることがわかる。

5.6 高齢者の寝室からトイレまでの距離

ここでは、寝室がリフォームを行った範囲外にあり図が無い、間取りに高齢者用の寝室という記述が無いなどの理由でサンプルを除いたため、この分析では有効サンプルが少なくなっている。

リフォーム後において、高齢者用の寝室からトイレまでの距離のなかで最も割合が高いのは、「0～1.0m未満」、「1.0～2.0m未満」、「5.0～6.0m未満」であった（図 21）。そのなかで、リフォームにより寝室から直接トイレに出入りできるようになったことを表す「0m」の世帯は、7サンプルであった。割合をみると、4.0m未満の短い距離が、半分以上を占めており、平均は、4.3m

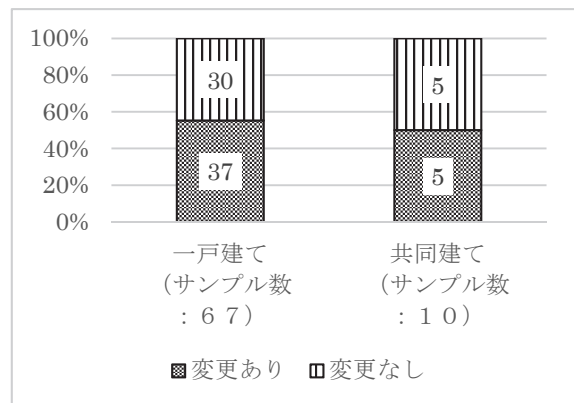


図 20 建て方別、トイレの扉を変更した世帯（「増設」・「不明」を除く）
（サンプル数：77 戸）

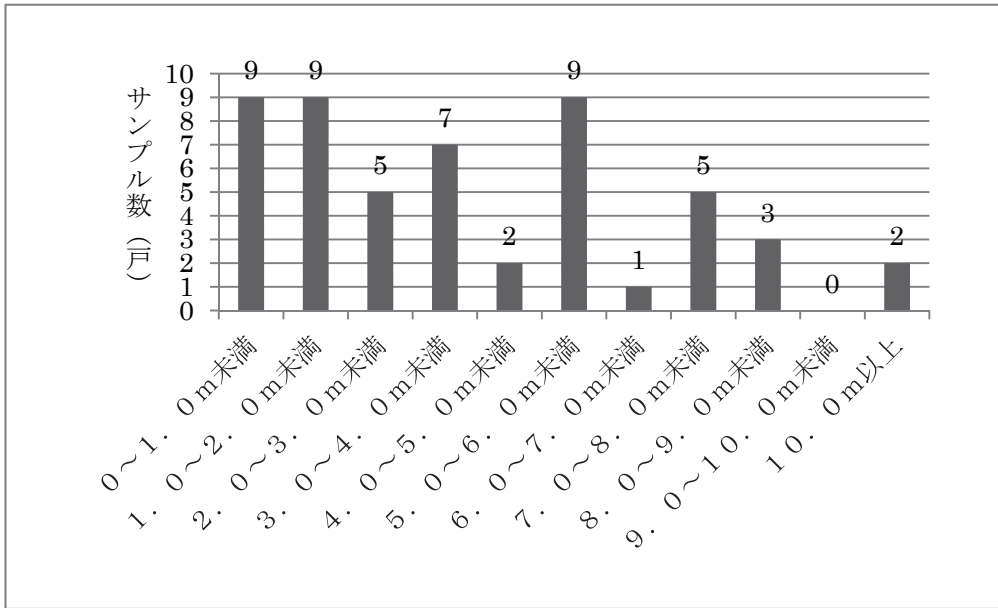


図 21 リフォーム後の高齢者の寝室からトイレまでの距離
(サンプル数 : 52 戸)

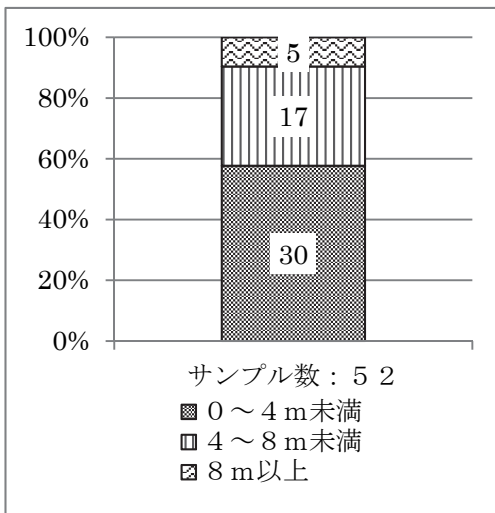


図 22 寝室からトイレまでの距離の割合
(サンプル数 : 52 戸)

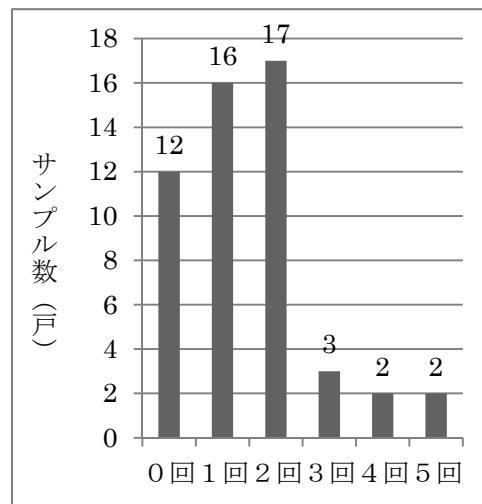


図 23 リフォーム後の高齢者の寝室から
トイレまでの動線中に曲がる回数
(サンプル数 : 52 戸)

であった (図 22)。このことから、高齢者を含む世帯においては、トイレと寝室が離れすぎない間取りが好まれることがわかった。

また、高齢者の寝室からトイレに行くまでに曲がる回数をみると、0回から2回以下の世帯がほとんどで、最も多いのは2回曲がる世帯であった (図 23)。

リフォーム前の高齢者の寝室が判明した 19 サンプルについて、リフォーム前後の高齢者用の寝室からトイレまでの距離の変化をみたところ、寝室からトイレまでの距離が 4.0m 未満のサンプルは、リフォーム後もあまり距離の変化がみられないが、5.0m 以上になると、リフォーム後に距離

表7 リフォーム前後の高齢者用の寝室からトイレまでの距離の変化（戸）

後 前	0～ 1.0m 未満	1.0～ 2.0m 未満	2.0～ 3.0m 未満	3.0～ 4.0m 未満	4.0～ 5.0m 未満	5.0～ 6.0m 未満	6.0～ 7.0m 未満	7.0～ 8.0m 未満	8.0～ 9.0m 未満	9.0～ 10.0 m 未満	10.0 m 以上	合計
0～ 1.0m 未満	1											1
1.0～ 2.0m 未満		3		1								4
2.0～ 3.0m 未満		1										1
3.0～ 4.0m 未満					3				1			4
4.0～ 5.0m 未満	1	1				1						3
5.0～ 6.0m 未満					1							1
6.0～ 7.0m 未満												0
7.0～ 8.0m 未満				1								1
8.0～ 9.0m 未満										1		1
9.0～ 10.0 m 未満				1					1			2
10.0 m 以上											1	1
合計	2	5	2	5	1	0	0	1	2	0	1	19

が短くなるサンプルが増加することがわかった（表7）。このことから、高齢者用の寝室からトイレまで5.0m以上離れている世帯では、高齢者が不満や不安を感じていたことがうかがえた。

6. まとめ

以上の分析から、高齢者を含む世帯では、築20年から築49年の木造一戸建てを、延床面積の20%から79%にあたる様々な規模でリフォームし、その結果、延床面積が100㎡から149㎡になる世帯が多いことがわかった。また、水廻りのリフォーム箇所としては、高齢者を含む世帯においても含まない世帯においても、台所をリフォームする世帯が最も多いが、高齢者を含む世帯においては、台所に加えて、トイレもリフォームを行っている比率が高いことがわかった。

高齢者を含む世帯を対象に行ったトイレの分析より、得られた結果を総合して考えると、高齢者を含む世帯における理想のトイレ像は、以下のようなものとなる。浴室と近く、広さが1.7㎡程度（目安は0.5間×1間）あり、扉は引き戸又は外開の開き戸で、寝室からの距離が4.0m前後と離れすぎず、動線において曲がる回数が2回以下のものである。

老後を元気に過ごすためには、もちろん人とのつながりや、いきがいを得ることなども重要である。しかし、一日の大半を過ごす住宅を改善することで、暮らしが豊かになるはずである。今後も増えていくとされる高齢者のためのリフォームにより、高齢者やその家族が快適で安全な暮らしを実現することが望ましい。

参考文献・参考ホームページ

- 1) 内閣府,「平成 26 年版 高齢社会白書」
- 2) 総務省統計局,「平成 25 年 住宅・土地統計調査(速報主計)」
- 3) 国立社会保障・人口問題研究所,「将来統計(全国推計)平成 25 年 1 月推計」
- 4) 国土交通省 平成 24 年 3 月発表,「中古住宅・リフォームトータルプラン」
- 5) 総務省統計局,「平成 25 年 住宅・土地統計調査 特別集計」
- 6) (公財)住宅リフォーム・紛争処理支援センター,「住宅相談統計年報 2014」
- 7) 一般社団法人住宅リフォーム推進協議会,「平成 24 年度 住宅リフォーム実態調査」
- 8) 国土交通省住宅局,「平成 20 年 住生活総合調査」
- 9) 愛知ゆとりある住まい推進協議会,「平成 25 年 愛知県わが家のリフォームコンクール応募要項」
- 10) 内閣府,「平成 22 年 介護保険制度に関する世論調査」
- 11) (株)ホームプロ,「ホームプロ」(リフォーム会社紹介サイト)
<http://www.homepro.jp/kaigo/basic/iso005.shtml>
(平成 27 年 1 月 30 日アクセス)
- 12) 総務省統計局,「平成 20 年 住宅・土地統計調査」
- 13) 愛知ゆとりある住まい推進協議会(2015),「知ってよかった住まいの知識」
- 14) 厚生労働省,「平成 25 年 国民生活基礎調査」
- 15) 窪田恵子, 栃原裕, 庄山茂子, 大中忠勝, 吉武美佐子, 人間と生活環境
12(2),73/85,(2005),「高齢者が居住する住宅のトイレ環境の実態と問題点―世帯構造と身長ならびに年齢との関連―」
- 16) 野村歡, バイオメカニズム学会誌 vol.32,No.4(2008),「排泄のための住環境整備」